

「コッコマイ」 ～ 麴町アパート物語 ～ （初稿）

脚本 相良 真美

《登場人物表》

「麴町アパート 203号室」の住人たち

○玉山淳之介 … サラリーマン。真面目に働いているのに給料が上がらないのが、最近の悩みの種。

○玉山きよ … 主婦。物価高のあおりを受け、家計のやりくり
に苦心中。

○玉山五郎 … 淳之介の父。常に厳格な雰囲気醸し出している。
説教臭くなるのが、たまにキズ。

○玉山ユウキ … 淳之介ときよの子ども。現在、書道家を夢見
て、ニート生活。

（男女どちらでも可）

《概要》

都会のビル街・麴町の片隅に、人知れずひっそりと佇む、昭和の
香り漂う「麴町アパート」。そこには、人情味あふれる様々な人々
が暮らしている。

「麴町アパート 203号室」に暮らすのは、玉山一家。サラリ
ーマンの淳之介は真面目なサラリーマンだが、昨今の物価高のあお
りを受け、一家の暮らしは、決して楽ではない。そこへ、備蓄米や
ら何やらの「令和の米騒動」が一家を襲ってしまい……。

《脚本》

○玉山家・居間

晩酌をする淳之介、家事をするきよ、新聞を読む五郎、
書道の練習をするユウキ。

きよ「お父さん」

淳之介「(ビール片手に) ん？」

きよ「明日、スーパー付き合ってね。『お米の日』だから」

淳之介「『お米の日？』」

五郎、スーパーのチラシを淳之介に見せる。

淳之介「(チラシを見て) 備蓄米、5キロで1980円……」

ユウキ「数量限定なんだって」

淳之介「(他人事で) へー」

五郎「『へー』じゃねえだろ、このバカちゃんが。お前も並ぶんだ、スーパーに」

淳之介「えー(めんどくさい)」

ユウキ「ねえ、見て見て。ジャン」

ユウキ、自ら書いた筆字の「備蓄米」という字を、
同に見せる。

きよ「『備蓄米』……」

ユウキ「(一同に書を見せびらかし) どう？ 米を備蓄してる感じ、出てるっ！」

きよ「(どちらとも言えず) うーん」

淳之介「(嫌味で) 出てる出てる」

五郎「(本気で) 上手い！」

ユウキ「ありがと」

五郎「(急に説教じみて) ユウキ、お前が書道家として大成する頃には、じいちゃん、死んでると思うけれども」

ユウキ「え、そんな、死なないですよ」

五郎「ユウキは天才だ。じいちゃん、信じてる」

ユウキ「うん。ありがとう！ (調子に乗り) よっしゃ、おじいちゃんに褒められた記念ということで、これ『備蓄米』の書、イチキュッパで売っちゃおうかな〜」

淳之介「百九十八円なら買っつてやる」

ユウキ「えー安過ぎ〜」

きよ「ねえねえ、それにしても、すごいと思わない？ 明日、『古

古米』売るのよ、『古古古米』、『古古古古米』とか『古古古古

米』じゃないのに、このお値段。魅力的だわ。絶対買わなきゃ」

淳之介「（大して興味が無く）ふん」

五郎「世知辛い世の中になったもんだ。令和にもなって『ニワトリの餌』を食う時代が来るなんてよお……」

ユウキ「『ニワトリの餌』？ え、どういこと？」

五郎「昔はな、古い米を、ニワトリに食わしてたんだ。『コッコ

米』の『コッコ』って、ニワトリの事だろ？」

ユウキ「違う違う。『コッコ米』じゃなくて、『古古古米』。古い米より、さらに古いってこと」

五郎「古い米でも、米は米。食えりやあ天国」

きよ「ねえみんな、ちなみにだけとき、『古古古古米』と『古古古古米』、どっちが良かった？」

ユウキ「え……ちなみに昨日は？」

きよ「昨日のは『古古古古古米』、先週が『古古古古米』」

淳之介・五郎・ユウキ「（どっちとも言えず）うん」

きよ「『古古古古古米』って、炊く時に日本酒入れると美味しくなるんだって。だから昨日、やってみただけど？」

ユウキ「（話を合わせ）あーやっぱりね。んーなんか美味しかった気がする」

きよ「そー？ 良かった」

淳之介「まー俺はどっちも美味かったけどな」

きよ「あなたは味オンチだもんね」

五郎「古い米でも、米は米。食えりやあ天国」

ユウキ「（『また言ってるよ…』と呆れつつ）天国テンゴク」

五郎「戦争中はな、カボチャと芋しか食えなくて」

ユウキ「呆れて、ボソツと」また始まった……」

五郎「大人も子どももみんな、腹空かしててよお……米なんて、新しい古い関係ない。食えるだけで贅沢なんだ。分かったか、

ユウキ？」

ユウキ「（スマホをいじりつつ、適当な返事で）はい」

きよ「そういうわけで、お父さん、明日よろしくね。『備蓄米』、一家族につき一袋だから」

淳之介「一家族につき一袋……え、じゃあ、俺並んでも意味ないよね？」

きよ「どうして？」

淳之介「だって俺達、家族じゃん？」

きよ「イチイチうるさいわね。私とあなたは、結婚前は赤の他人。

だからOKなの」

淳之介「いやでも……」

五郎「俺も並ぶんだ。お前も並べ。ユウキも並ぶんだから」

淳之介「ウソおー？」

ユウキ「大丈夫だって、バラバラに並べば。うちら、家族だけど、

全然似てないし」

五郎「その通り。今は『令和の米騒動』。背に腹は代えられん」

淳之介「お前らさあ……」

きよ「話を遮り、教師風に」はい、みなさ〜ん。いいですか

〜？ 明日、朝8時から、スーパーの正面玄関で、『備蓄

米』の整理券を配るそうです。なので明日、早起きして、

『備蓄米』ゲット、頑張りましょう！」

五郎「オ〜っ！」

ユウキ「『備蓄米』、ゲットだぜ！」

きよ「よろしくっ！」

（終）